

過去の【今月の1冊&コラム】

2024年5月:今月の1冊・・・著者からの一言

「学校でできる 言語・コミュニケーション発達支援入門」

事例から学ぶ ことばを引き出すコツ

著編著：池田泰子 著：松田輝美 菊池明子出版社：学苑社（2022年発売）



本書は、実際に学校の先生方と連携を行った経験から、このような一冊があるといいなという思いを形にしたものです。学校の先生と言語聴覚士(ST)が連携する際、本書に掲載されている言語・コミュニケーションに関する専門知識を共有しながら意見交換を行うと、子どもへの効果的な支援につながるであろうと考えています。また、ゆっくり発達している子どものことばの発達を促すには、複数の専門的視点や知識が必要です。本書の28の事例から今の子どものことばの状態をどのような視点で観察したらよいか、そのアセスメント結果をどのように解釈するかという支援の流れのコツをつかんでいただけたと思っています。

[リンクはこちらから](#)

本書が出版される前は、学校訪問の際、専門書を何冊も持ち歩いていました。評価結果を担当の先生にフィードバックする際には、その都度該当するページを開いて説明していました。持参した資料は専門書なので、伝えたい内容に至るまでに説明が必要であり、貴重な連携時間をそのために費やさなければなりません。また、予想外の質問をいただいた時は「あの本を持ってくればよかった」と後悔することも多かったのですが、今は幅広い領域の知識がわかりやすく一冊にまとまっている本書があるので、専門知識の説明に時間を要することなく担任の先生との意見交換の時間が増えました。

産休育休代替で岩手大学に勤務した際に松田輝美先生と菊池明子先生と出会い、3名で本書の原本となるリーフレットを作成しました。両先生は、「摂食嚥下障害」「学習障害」に対する支援経験が豊富でしたので、立ち話で何う支援の話が大変興味深く、「メモしたい」「一人で聞いているのはもったいない」という思いが積もっていましたが、ある時「事例を載せたリーフレットを作ろう」と閃きました。学内研究費で作成したリーフレットを見た複数の方々から「出版してほしい」というありがたいお声かけをいただきましたが、何をどうしたら良いかわからず保留にしていました。その後、中川信子先生にお力添えをいただき、幸いにも出版に至りました。

本書の第1章には、言語・コミュニケーションの発達に関する基礎知識を掲載しました。特別支援学級の先生が言ってくださった一言で、この内容を入れよう決めました。その先生とは複数回の連携を行っていましたが、ある時「先生(池田)から子どもの今のことばの発達の状態を教えてください、次にどこを目指せばよいか、どのように目指せばよいかを教えてくださいるのでやるべきことがわかる。しかし、それを達成した後何をするれば良いかわからない」と本音を話してくださいました。ことば・コミュニケーションの発達のものさしを示すことで、先生方は見通しが持てるようになり、安心して支援を行えるようになるのではないかと考えました。

第2章には支援の考え方を掲載しました。行っている支援が子どもにプラスになっているのかを、自身で仮説検証する視点を持てると良い方向に進められます。効果的な支援を行うための視点を増やすために、具体的な例を挙げて解説しています。

第3章には事例を掲載しました。アセスメントを踏まえた支援の流れからことばの発達を促すコツをつかむために、「読み書き」「コミュニケーション」「指示に従えない」「授業に集中しない」「話すこと」「発音が不明瞭」「食べる飲む」の領域について28事例を挙げています。

第4章には支援に役立つ「知的活動を支える姿勢・運動」「知能検査」「摂食機能・口腔運動の発達」「吃音の進展段階」「日常生活音と難聴の程度」「便利に使える支援グッズ」等のことば・コミュニケーションに関連する14の知識を掲載しています。

なお、本書は言語・コミュニケーションの発達支援の入門書です。もっと詳しく知りたい場合は、専門書へ読み進めて頂きたいと思います。

以上の内容が盛り込まれています。学校場面や学校の先生とのやりとり場面だけではなく、保護者支援にも役立つ一冊です。学校の先生やSTの皆さんに活用していただければ幸いです。

2024年5月 子どもの発達支援を考えるSTの会 会員 池田 泰子
松田 輝美

2024年4月:今月の1冊・・・著者からの一言

「ことばをはぐくむ 発達に遅れのある子どもたちのために 新装版」

ことばをはぐくむ (新装版)

発達に遅れのある子どもたちのために

中川信子 著



著者：中川信子 出版社：ぶどう社,2024年発売

1986年出版の『ことばをはぐくむ』が38年の時をへて、装い新たにお目見えしました。あまりに古びた部分や、今の時代にそぐわない用語をなくし、また、旧版で「お母さんが」「お母さんが」を連発していたのを、新装版では極力「親」「親ごさん」という言い方に変えました。お母さんだけが子育てに孤軍奮闘する時代ではなくなって来たという期待も込めてです。

[リンクはこちらから](#)

そのような小修正は加えましたが、おおすじの内容は旧版と変わっていません。

今もですが、当時も子どもの発達に伴走するST(言語聴覚士)は足りていませんでした。ことばが遅かったり、発達が遅れていたりすると、保護者も先生たちも“ことば”が言えるようにとそれだけに焦点をあてて、いやがる子どもにくりかえし教えたり、ムリに言わせようとしていました。

“ことば”は、毎日の生活の中でのお手伝いや楽しい遊びの経験の中から自然に出て来ますし、ムリに教えなくてもその子なりのやり方でちゃんと進歩していくものなのに。

私は、あせる親ごさんや園の先生たちに「ゆっくりの歩みに付き合っ、その子なりの成長を見届けましょう」と伝えたかった。でも、単に「大丈夫ですよ、ありのままに」というだけではなく、ことばの育ちの道すじと、ことばがよりよく育つために必要な接し方も同時にお伝えするのが言語聴覚士としてやるべき使命だと思ひ、それを公益社団法人発達協会発行の「発達教育」誌上の連載で書きました。

当時は、今40代の息子たちがまだ小学生と保育園児。2人を寝かしつけてからダイニングキッチンで原稿を書いたものです。夜のうちに書き終わらず、翌日の昼間までかかると、息子たちに「お母さんはここにいるけど、いないと思ってね!」と言いつけて原稿に没頭しました。

大きくなってから息子たちは「オカアは『ここにいるけどいないと思ってね』とか言ったけど、あれ、絶対ムリ難題だったよな」と言っていました。そんな親でも子は何とか育ちました。

その連載が一冊の本になり、旧版『ことばをはぐくむ』が世に出たのです。

ある方が「本は、作者の力が50%、読者の力が50%。深く読んでくれる読者と幸運にも会えると、その本は著者の力が及ばなかった120%にも150%にもなれるんですよ」と言っておられました。

旧版の読者から「バイブルにしています」「ことばの本としてもですが、自分の子育てへの励ましをもらっています」との声を多くいただき、この本は幸福な旅をしているのだなと思ってきました。

今回、新装版を送り出すにあたっての願いも思いも旧版の時と全く変わりません。

私からのメッセージが必要な方のもとに届き、少しだけラクに子育てができますように。

新装版も幸福な旅をしてくれますように。

2024年4月 子どもの発達支援を考えるSTの会 代表 中川信子

※表紙画像等については出版社さまより利用許諾を得ております。

過去の【今月のコラム】 2024年3月:コラム

「卒業の先の人生へ」



特別支援学校の高等部（知的障害部門）で勤務しています。教員免許はないので担任はもっておらず、言語聴覚士（ST）として学校全体を随時巡回したり、先生や保護者の方からの依頼があれば個別の対応をしたりしています。

2月も下旬になると、3年生の各クラスでは「卒業まであと登校〇日」というカウントダウンの数字が書かれたり貼られたりし始めます。ついに先日、その日数が1桁台になり「うわあ、あと〇日やね」「今日で〇〇の授業最後だった～」と言ったやり取りを毎日するようになりました。

小学校や中学校を卒業すると、進路先は中学校や高校などの「上の学校」になると思いますが、特別支援学校高等部を卒業すると、ほとんどの生徒さんはその先「社会」へと出て行くこととなります。

当校に入学する生徒は、特別支援学校中学部と中学校の特別支援学級からがほとんどですが、1学年に若干名、地域校の通常級からや、様々な理由で中学卒業後に一旦別の学校へ1～2年行ってから入り直してくる生徒（過年度生）もいます（前校での学習状況等により、当該学年に編入になることもあります）。当校は義務教育の年齢ではない高等部だけの学校なので、入学前には本人と保護者には学校見学をして教育課程の説明を受けた上で、入学の意思確認をして入学してもらおう事になっています。

しかし、数年前にいた生徒のことです。その生徒（Aさん）は実は過年度生として、不本意で当校の1年生に入学してきていました。「ほかに行くところがなかったから」。小学校では通常級で勉強について行けず、出来ない自分が周りにどう思われるのかという不安から不登校に。中学で特支級に在籍するもなかなか学校には行けず、そんな自分が嫌いで情けなく思う日々が続いていたそうです。当校に入り直したことも情けない自分の一部だったのでしょうか、みんなと年齢が1歳違うことは秘密、でした。

ところが、当校で過ごすうちに少しずつAさんの中で変化が起こりました。担任の先生方の力が大きかったのはもちろんですが、友達の存在が大きな影響だったそうです。地域の中学校では特支級の同学年の生徒は数人で相性もあり友達ができにくかったとか、交流級に行ってもみんなの後ろを着いて行動するしかなかったようなことも多くあったことだろうと思われるのですが、当校では同じ学年に約40人生徒がいます。出来ないこともクラスメイトからの目を気にしなくて良く、得意なことでは競い合えたり、趣味の話が合う友達ができたりと、ようやく心を構えずに学校生活を送れるようになったのだと思います。また、当校には最重度から軽度までの幅広い生徒がいるのですが、思うように話せない、動けない友達がいるということを知り、と本人談。その生徒にクラスメイトとして教室移動や意思疎通などを手伝ったりする中で、今までできないことばかりで大嫌いだっただ自分が、人の役に立つことができることに気づいたことで、自分にもできることがある。と、この学校でやっていく足場を見つけられたのだと思います。

果たしてAさんは、3年生では下級生に「A先輩!」と憧れられる存在になり、卒業式では卒業生代表としてしっかりと答辞を読んで旅立っていきました。

STとしてのエピソードとしては、実はAさんについては3年生の12月になって、国語の先生から読みにくさのことで相談を受け、本人の希望もあって卒業までの3ヶ月間、一緒にビジョントレーニングや問題集に取り組みました。授業は抜けられないので始業前の時間を使い、私とは週1回、あとの日は渡したトレーニングメニューに自力でコツコツと取り組み、問題集を1冊やりきりました。この3か月のAさんの頑張りのことでは、私の方が「高3の卒業間近ギリギリまで子どもは伸びるんだ」ということ（当たり前のことかもしれませんが）を教えてもらったと感じています。おそらく、このタイミングだったからの結果だったのだろうとも思っています。1年生のときではこうはいかなかったのだろうか、と。

今年も1人、3年生の個別学習に対応しているのですが、卒業式の前々日まで希望され、もちろん最後まで一緒に頑張ろう、と返事をしました。

これまで送り出した生徒達の経過を見ると、全員が卒業すればもう安心、というわけには行かず進路先で悩みを抱えて学校に相談に戻ってきたり、事業所を変わったりなど、まだしばらく進路担当や元担任の先生方はフォローが続きますが、まずは一区切り。この3年、自分のペースでそれぞれ成長してきた生徒達の生きていく力を信じて、心をこめて送り出したいと思います。

2024年3月 子どもの発達支援を考えるSTの会 会員

2024年2月:コラム

「再会で思ったこと」

「先生、私のこと覚えていますか?先生が話すので参加しました!」

先日、オンラインの研修会で吃音について話をする機会をいただきました。話が一通り終わり、参加者からの質疑応答の時間に言われた突然の言葉でした。発言した参加者は、新採用時に学級担任をした際に受け持った男の子でした。当時元気でおしゃべり好きだった男の子は、落ち着いたアラフォーの男性に変わっていました。突然の告白に対する驚きと、懐かしさ、何より嬉しさで気持ちや行動が落ち着かなくなっていました。新採用当時の私は、授業や学級経営でうまくいかないことの方が多く、楽しかった思い出とともに、当時の子どもたちに対して申し訳なさを含む苦い思いもあります。それでも、懐かしい様子で先生と声を掛けてくれる教え子に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私は、今年度、教員として30年目を迎えました。通常学級担任から教員生活をスタートし、ことばの教室、特別支援学校、難聴学級、知的障がい学級、情緒障がい学級など特別支援教育に長年携わってきました。現在、3度目のことばの教室を担当しています。歳のせいか、最近、教え子と再会する機会が増えてきました。教え子たちは、就職し社会人として頑張っていたり、素敵なお母さんになっていたり様々な姿を見せてくれます。当時、指導で手こずらされた子が、しっかりと社会人になっているのを見ると、人に内在している成長する力の大きさを感じさせられます。

子どもの将来の姿を見据えて、現在何をしたらよいか考え、日々の指導や支援の手掛かりにすることが大事であるということが、特別支援教育で言われます。障がいがある子どもを思い遣る気持ちはわかるものの、私はじっくりこななものをずっと感じてきています。そのじっくりこななさの一つ目の理由は、「人生はその子自身のものである」ということです。例えば、周囲の人のほとんどがうまくいかないだろうと思うことであっても、当事者がやりたいなら挑戦するのを見守る態度も必要だと思うのです。大人が、邪魔なものを除けてあげて、安全な道を歩かせるようになってしまわないかということをおそれています。二つ目の理由は、将来を見据えた指導・支援は、どうしても訓練的な要素が強くなりがちになってしまうのではないかということです。目の前の子どもそのものにスポットを当て、その子のやりたいこと、その時点でできる力を生かしてあげることが大事だと思います。その子どもが今、笑顔で楽しく過ごしているかが指導・支援の良し悪しの基準だと思います。偉そうなことを書いてしまいましたが、この考えには私自身のこれまでの反省があります。

もうすぐ、3月、別れの時期を迎えます。子どもたちの力を信じて見送ってあげたいと思います。そして将来の再会での驚きや喜びを楽しみに待ちたいと思います。



2024年2月 子どもの発達支援を考えるSTの会 生江英一
(福島県伊達市立上保原小学校 教諭)

2024年1月:コラム

「あれから29年」

皆さま、新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

さて、タイトルを見てピンとこられた方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか。毎年12月に入ると新聞やニュースでの報道が増えるので、お気づきの方もおられるかと思えます。「あれ」とは阪神淡路大震災のことで、この1月17日で29年となります。

当時、私は2歳で神戸市に住んでおりました。被災自体の記憶はないものの、両親の話や小学生になってからの震災学習では自分の知っている神戸の街が悲惨な状況に陥っていたことを知りました。毎年神戸の小学校の大半は1月になると“[しあわせ運べるように](#)”が今月の歌になったり、[ルミナリエ](#)（今年は1月19日～28日）があったりと非常に身近に神戸という街の被災体験を感じる機会があったように思います。

言語聴覚士になり、日々の臨床の中で、ふと「今、自分の職場に来ている子ども達が被災した時に避難所に行けるのか。避難所開設側はどこまで発達障害に理解があるのか。」と思うことがありました。その後も、普段と異なることに対して敏感な子どもが避難所で生活できるのか。偏食のあるお子さんが避難所での非常食を食べることは難しいだろう。と考えれば考えるほど、ハードルはかなり高いのではないかと思いました。大人でさえ、避難所生活で疲弊してしまうなか、子どもとなると難しさは増す一方です。

そこで、私自身が公的施設に勤務していることもあり、公助の部分の中から変えていけるような啓蒙活動ができれば良いなと思い、県土会の災害対策部に入り、JRAT（日本リハビリテーション支援協会）の一員として県主催の合同避難訓練や研修に参加させていただいています。

今回は研修の中で、よく実施されるHUG（ハグ）と呼ばれる避難所運営ゲームについてご紹介させていただきます。グループで実施するカードゲームになっており、避難所の図面と合わせて使用します。カードには、居住地・避難者の名前・性別・年齢・家族構成・備考が書かれている避難者カードとイベントカードがあります。そのカードが主催者側からランダムに配布され、避難所のどこに避難者を割り振るかというゲームになります。正解というものはなく、いつも終了後に反省する部分がどこかしらにはあります。中でも、カードの備考部分が非常に悩まされる原因になります。備考には、持病や障害などが記載されており、「この人は体育館で良いのか、教室やダンボールベッドの方が良いのか」を短時間のうちに判断しないとイケません。次の瞬間には、また新たな避難者カードやイベントカードが配布され、その対応に追われます。その様子はリアルな避難所の受付といった様子になります。「もしかしたら今来ている人よりも重度の人があとからくるかもしれない」という不安や限られた資源の中、最適解をその場で判断しないとイケない練習というのは非常に良い経験になっているなと感じます。このようなゲームは特に避難所を開設する地方自治体の職員には是非していただきたいなと思います。さらに、私の勤務する自治体の災害対策部や避難所運営者に向けて、発達障害のあるお子さんにはどのような配慮が必要なのか、今後、研修などを開催し、伝えていけたらと良いなと考えています。

最後になりますが、今年の日本言語聴覚学会が神戸で行われます。現在、私は実行委員として開催に向けて準備をしています。学会では、阪神淡路大震災から29年ということで、災害シンポジウムが組まれる予定です。阪神淡路大震災で被災したSTがどのような経験をしたのか、近年の自然災害で被災した地域のSTにもお話をさせていただく予定です。

また、当会の中川信子代表が教育講演を実施する予定であります。小児分野で働くSTはもちろん、成人分野で働くSTに小児分野に興味を持ってもらい、子どもの発達をサポートするSTが少しでも増えたら良いなと思

っています。ここ4年は、コロナの影響で子どもSTの会としては、対面の全国研修会を開催できていません。ぜひ、興味のある方は学会に足を運んでいただき、子どもSTの仲間と顔を合わせて、神戸という街を楽しんでいただけたらと思います。



2024年1月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員



※上記の原稿は、更新準備の関係で2023年12月に執筆されたものです。

1月1日の「令和6年能登半島地震」で被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、

早期の復旧をお祈りいたします。

2024年1月5日 子どもの発達支援を考えるSTの会 代表委員兼HP担当